

キース・ジョンストンの語りから“よいインプロ”を探る試み —TAE手法による分析を用いて—

専 攻 人間発達教育専攻
コ ー ス 教育コミュニケーション
学籍番号 M13011J
氏 名 大島 秀子

1. 問題と目的

インプロとは、improvisation（即興）から派生した「Improv」（英式）または「Improv」（米式）の日本語読みで、即興演劇の一ジャンルを指す。筆者は1990年代から国内外でインプロの舞台、稽古、ワークショップなどを経験してきた。そして、「よいインプロ」と呼べるものがあり、その感覚は共演者や観客とも共有できるものであると知っていた。

筆者は、「よいインプロ」にはインプロの外にも活用できる何かがあると感じそのフェルトセンス¹（それを体験した体には意味を持つが、言語化されていない何か）を感じてみたところ、「胸のあたりに存在し、高密度に充満している気体のようなもので、密度の高さに見合って、重量を感じる。それ自体の動きはなく、密度を増しながら外へ向かって膨張している感じで、その圧により胸が内側から押されて、少し苦しい。しかし、胸のほうが丈夫なので、胸が損なわれることはない。色は、灰色がかっている。明るい色ではないが、それ自体は優しいものだと感じた。意志のようなものをもっているのかもしれない。温度は冷たいわけではなく体温と同じか、少し低いぐらい」など、よいインプロの体感覚としてはそぐわないものが感じられた。そのため、よいインプロとは何か、についての筆者自身の理解を問い直し、「よいインプロ」というものを探究する中で、筆者の「よいインプロ」に関するフェルトセンスがどのように変化していくのかを検討することとした。その探究活動を通してよいインプロ

とは何かを筆者の主観的世界において深く理解し、その内容を理解の深化の過程と共に記述すること、その活用の可能性についても探ることを目的とした。

2. 方法

(1) 手続き

筆者がその理念のもと実践してきたインプロの指導者、キース・ジョンストン氏にインタビューを行い、「よいインプロ」とは何か」について、氏がインタビューで語った言葉の意味に沿って整理・記述する（分析1）。さらにその内容から体験される体感覚の意味するところを言語化する手法（TAE）を用いてその意味感覚を言語化する（分析2）。なお、TAEという手法の目的を損ねないため、実際には分析2、分析1の順に分析を行ったが、論文構成の都合上、分析1、分析2の順に結果を提示した。

(2) 分析の対象

分析の対象は、キース・ジョンストン氏に対して行った会話形式のインタビュー（2時間22分）内容であった。初めに「“よいインプロ”とは何か」と問い、その後筆者が会話の中で感じた疑問や、インプロを実践する上で当時疑問に思っていたことも織り交ぜながらほぼ自由会話形式で進めた。その後、インタビュー会話を英語のまま文字化した。発話が重なったり、英語の力が不足したりで聞き取れなかったところは断念したが、内容の理解には問題ないものであった。

3. 結果

(1) 分析1：インタビュー分析

インタビュー全文を和訳し、その後発話の

¹ ジェンドリン, E. T./村山正治・都留春夫・村瀬孝雄
(訳) (1982) 『フォーカシング』福村出版 (Gendlin, E.,

T., Ph.D 1978, 1981 FOCUSING second edition,
Eugene T. Gendlin)

内容を要約して、19 ページにまとめた。さらにその要点を箇条書きに短縮したものを作成し (9 ページ)、そこからよいインプロの要素を抽出して、分析し、「献身的でスペンティニアスなインプロヴァイザーが、観客が見たい、真実でかつ笑いやスリルのあるやる価値があるものを、リラックスしたたたずまいで遊べるときに得られるもの」だという結論を得た。

(2)分析 2 : TAE 分析

TAE (Thinking At the Edge) に基づく「ステップ式質的研究法」(得丸²2010)に沿って分析した。TAE とは、E. ジェンドリンが妻の M. ヘンドリクスと共同で開発したもので、「うまく言葉にできないけれども重要だと感じられる身体感覚を、言語シンボルと相互作用させながら精緻化し、新しい意味と言語表現を生み出していく系統立った方法」

(得丸 2010) で、14³ステップの手続きを経て行うものである。本研究では、得丸氏のサポートを受け、また氏の主催する「TAE 研究会」に参加して、メンバーの助言を得ながら分析を進めた。

ステップ 1～5 において、インタビューの内容から得られていると思われるフェルトセンスを表す文 (仮マイセンテンス) として

「この感じは **一貫した愛を持って客観視する** という感じである」を得た (ステップ 1)。さらに、フェルトセンスを感じ直すステップをたどり (ステップ 2～5)、フェルトセンスを示す文 (マイセンテンス) として「この感じは **一貫して真理が存在する** という感じである」を得た。

その後、インタビューデータの中からよいインプロに関して語っている部分の話のまとめごとに区切り、96 の事例シートが得られた。

ステップ 6 以降はその事例シートに基づいて分析を進め、ステップ 9 において、フェルトセンスを感じながら浮かんでくる言葉を書き記し、重要な 3 語 **A: 起こる感じ、B: 遊ぶ場**

所、C: 絵本の花 (絵本に描いてある花のような花の絵) を選んだ。

最終的にステップ 12 の過程において、“よいインプロ”とは何かを述べる次の文 (骨格文)「キース・ジョンストン氏へのインタビュー分析の結果得られた“よいインプロ”とは、絵本の花のある遊ぶ場所で、起こる感じが、体現されることにより示される、見本である。」を得た。

さらに、骨格文を説明する結果文を作成した。

以上が本研究の TAE のプロセスである。

考察

ジョンストンのインプロは、イギリスにおける学校教育への批判の上に立っている。規格に合わない子供が教師によっていかに排除されるか、またその環境がいかにスペンティネイティブの発現を損なうかについて、繰り返し述べている。そして、学校で行われていたことと逆のを行うことで、自身が臨時教師時代に受け持っていた「できの悪い、手に負えない」子供たちが、いかに意欲を示し、能力を発揮するかを目の当たりにした。氏のインプロ指導は、この経験の影響を受けているため、教育への示唆に富んでいる。

さらに、本研究での TAE 分析にて得られたキーワードの中から「見本」を取り上げ、教育の場に重ねてみよう。本研究で言う見本とは、その場の体が体験する、それぞれの真実である。教育においても、ある見本を得たとき、一人一人がそれぞれユニークな存在として、それぞれの学びを得るという場は、積極的に実現されて行ってほしい。答えが一つとは限らない学びがある。さまざまな答えの可能性が無限に広がる学びの場。お互いの違いを排除することなく、違いの質を知り、理解し合おうと努める学びの場。教育がこのような土壌の上に立つならば、多様化が進むであろうこれからの教室は実りあるものとなるだろう。

主任指導教員	中間 玲子
指導教員	中間 玲子

² 得丸さと子「ステップ式質的研究法—TAE の理論と応用」海鳴社,2010

³ 本研究ステップ 12 まで行い、結果を得た。